

2009年
5月8日
金曜日

山鹿久木 准教授（都市経済学）

人間と経済学

便益と費用を基準にものごとを考える、これが経済学の基本的な考え方のひとつである。それは、千差万別な人々の倫理観や価値観に左右されない客観的な判断を導くためのよき材料となる。しかしそれは決して人間を否定したような冷たい指標ではない。

奈良の興福寺所蔵の阿修羅立像が東京と九州の国立博物館で展示された。3つの顔を持ち、6本の細く美しい腕がのび、静かに合掌をしているあの日本で最も有名な仏像である。開館当時、一目この像を見ようと多くの人が博物館に足を運び、相当の待ち時間であったそうだ。

国宝を輸送する専門の仕事があることを先日あるテレビ番組で初めて知った。この阿修羅立像も当然国宝である。奈良に所蔵されているものを東京や九州で展示するのだから輸

送が必要である。ネットショッピングでさまざまなものが宅配されている今日、国宝の輸送と聞いても違和感はないかもしれないが、国宝の輸送は一大事業のようである。阿修羅像はこの世に一つしかない、しかも1300年もの間存在している。その国宝をあの美しい姿から一つの木片もはがすことなく、朽ちているかもしれない木の腕を脱落させることなく、道路の振動に耐えながら往復2000キロ以上の距離をトラックで移動する。専用の輸送器具等をわざわざ開発・作成し、半年以上も前からその一大イベントに備えるわけであるが、その輸送の責任者にかかるプレッシャーは相当のものだという。

さて、それほど大切なものをどうしてわざわざ運ぶのか。奈良に安置し、そこで一般公開すればよいでは

ないか。県外で見た人々は、交通費を払って見に来ればよい。それらの費用をすべて合計しても、一つしかない国宝を壊すリスクと比較するとはるかに小さいであろう。

この場合のコストは、輸送やその準備にかかる費用、国宝が輸送中に破損した場合の損害等が考えられる。しかし一方で、奈良にある時よりも多くの人々が、阿修羅像を実際に目にしたときに感じる何かしらの感情の総計が、それらの費用をはるかに上回っているであろう。そのため世界にある貴重な宝が、いろいろなところへ移動、展示されるというプロジェクトが実行され、そのプロジェクトから多くの人々が貴重な満足を得ている。

費用と便益を比較して、便益が費用を上回ればそのプロジェクトを実行するという考え方は、非常にシン

ブルで客観的であるために、今日政策判断にも広く採用されている。が一方ですべてを金銭換算して比較することへの抵抗や批判も多くある。しかし、たとえ金銭換算することが愚かに思われるようなものであっても、政策の方向によっては、犠牲になつたりさらには存在も疑われるようになることもある。その際、自らの主張を相手にきつちりと伝えるためにも金銭換算による費用と便益の比較の方法は非常に役にたつ。